

受講番号 19058 学校名 一宮中学校 氏名 吉本 慶子

研究の背景

研究対象(学年、クラス等) 2年4組 生徒数 35人 名
 科目名 2年生 単位数(授業時数) 3 時間 使用教科書名 NEW HORIZON English Course 2

クラスの様子・特徴

ティーム・ティーチングにより、授業を行っている。T2は英語以外の教科の先生である。生徒は概ね落ち着いた態度で学習に取り組んでいる。明るく前向きな生徒が多く、積極的に発表したり、音読の時にも大きな声で読むことができる。

問題の確定

英語を習得するうえで一番の基礎となる「単語をいかに正確に覚えるか」ということを主題に考えていきたい。

予備調査



A 授業の観察

英語を話したり、聞いたりすることは比較的得意であるが、書くことが苦手と感じている生徒が多い。テストの結果からも、単語を覚えていないことが原因で点数が取れないことがわかる。多くの生徒が正確に単語を書くこと、正しい語順で英文を書くことができていない。

B 生徒による授業評価

アンケートの結果を見ると「生徒の意見や考えを大切にしている」「一人ひとりに気を配り、声をかけている」という項目の満足度が高い一方で「わかるまで粘り強く教えてくれる」という項目の満足度がやや低くなっており、改善していかなくてはいけない。

C 学力データ

標準学力調査の結果から、授業中しっかり先生の話の話を聞いたり、ノートをとったり、まじめに勉強しているつもりなのに点数が取れていない生徒が多いことがわかった。また、大半の生徒が「書くこと」を苦手としている。2年生になり学力差が大きくなりつつある。

リサーチ・クエスト



英語を習得するうえで基となる単語の発音や意味を理解し、正確に英語を書くことができるようになるとともに、学習成績だけでなく、生徒たちの学習意欲も向上させるには、どうすれば良いか。

仮説・実践・検証



仮説1



実践1



検証1

授業の中で単語テストを習慣化すれば、「単語はきちんと覚えなくてはならない」という意識が生まれてくるだろう。

新出単語のリストを作り、10個ずつ教師が発音した単語のつづりと日本語の意味を書くテストを行う。前の時間に予告をし、テスト直前にはフラッシュカードを使って復習するか、3～5分程度「テスト勉強」の時間を与えた。

1学期の最初の頃に比べ、突拍子のない間違い(発音はタ行の音から始まるのに「m」や「n」で書き始めるなど)はほとんどみられなくなった。また、解答の半分は日本語で書く問題であり、カタカナ英語として使われている日本語などは勉強してなくても書けるということもあり、0点は少なくなった。単語を覚えようという意識づけにはなったと思う。

仮説2



実践2



検証2

単語の覚え方について調査することによって、生徒のつまずきが、発見できるのではないか。

1学期の終わりに、アンケートをとり、結果をまとめる。夏休みにローマ字を「ほとんど覚えていない」と答えた生徒に、学校に来てローマ字を覚えようと言ったが、英語ができないので呼び出されると思ったのか、「本当はだいたいわかる」とか「自分で覚えるから2学期まで待ってほしい」ということで、見送ることになった。

単語の覚え方についての質問で「わからない」と答えた生徒は「覚えようと思ったことがないのでわからない」生徒と「思い返してみても文字から覚えるのか音から覚えるのか意識しておらず、わからない」生徒との2通りに別れているように思われ、質問の仕方にもう少し工夫が必要だったと思う。

仮説3



実践3



検証3

視覚的に印象に残る方法や英語を聞かせる方法を工夫し、英語を使わなければならない状況を意図的に仕組んでいけば、重要な英語表現が記憶に残りやすいだろう。

夏の講演での「単語を覚える時に、音を覚えていた方が定着しやすい」という話をヒントにして、音読の方法も色々工夫してみた。日々の音読練習だけでなくリーディングテストの方法も新しいものを試みた。また、視覚的な工夫としては、新しい文法事項のまとめについて黒板に貼る紙の色やペンの色の使い方に気を配ったり、教科書の読み物ページでは視覚的に文法構造を表し読解させる工夫を試みた。

定期テストの平均点は1学期に比べ上がった。他の先生方も協力して、授業の方法だけでなく、テスト前の取り組みやテストの内容についても工夫をしたことや、生徒たちも努力した結果だと思う。これからも授業を組み立てていくうえで、様々な活動を意図的に仕組んでいきたい。

研究の成果



はじめは今の子どもたちは10年くらい前の子どもたちと比べると、単語を正確に書けなくなったと思っていた。だが、この研修を進めていくうちに書けなかったのは、まだ1年しか勉強してなくて、多くの英語に触れていなかったり、書く訓練が、以前と比べ少なくなったからだと思うようになった。授業時数も減り、「使える英語」を目指し、授業中は書くことよりも「聞くこと」「話すこと」に力を入れてきたように思う。だから、生徒が以前のように書けないのは当然の結果だと気づけたことは大きな成果だと思う。

今後の授業改善の課題

将来、英語をペラペラしゃべりたいとか、外国に住みたいとか、大きな目標を持って英語の勉強をしている中学生もいるが、多くは目の前の高校進学のために英語を勉強している。そのため、彼らの望みはテストの点がとれることであり、『書く力』を必要としている。その力をいかに伸ばしていくか、どう学習に組み込んでいくかが大きな課題であり、今後、仮説3の試みを継続していきたいと思う。

リサーチについての問合せ先:

職場電話 088-845-1102